

飛田 博実先生のご退職に寄せて

橋本 久子

飛田博実先生、ご退職おめでとうございます。約 35 年間という長きにわたり化学専攻の教育・研究にご尽力頂きましたこと、まずは心より感謝申し上げます。ここでは、無機化学研究室の後を継いだものとして、というよりは、おそらく最も長くお世話になったものとして、思い出を振り返ってみたいと思います。

先生に最初にお会いしたのは、私が大学 1 年生の時のことです。その当時、友人が中心となって、理学部の研究室を紹介する本を作ることになり、その友人に強引に訪問させられたのが無機化学研究室でした。明るく声の大きな荻野教授のご説明のあと、当時助手になったばかりの飛田先生が出てきて、すごくエネルギーに、何も分からない 1 年生の私に対し、「この装置はこういうもので、こういうことが出来るんですよ」と、片っ端から研究室内の全部の装置を説明して下さいました。今思えば UV-vis 装置の所で、「これは物質がある特定の光を吸収するのを測定できるのですよ」と言われたので、それまで黙っていた私が、「じゃあ、逆に、放出する光も測れるのですか？」と聞いたら、少し狼狽し、「ああ、そういう装置もありますが、ここにはありません。」との答えでした。妙に鮮明に思い出す一コマです。

それから 3 年後、配属研究室としてたまたま無機化学研究室を選んだ結果、その後の 6 年間で直接の指導教員としてお世話して頂くことになりました。この 6 年間のうちに今につながる本当に多くのことを学んだと思います。第一に、有機化合物から無機化合物まで、基本的な合成・分離・精製の実験技術を隈無く教えて頂きました。酸素やアセチレンを使った非常に気を遣う実験も、決して他の女子学生や男子学生にはやらせないところ、私には当然とばかり、防御ヘルメットや銀色の大きな防御手袋をわざわざ購入してまで実験させてくれました（もっとも、私は望んではいませんでした、,,）。第二に、科学文章の書き方を徹底的にご指導頂きました。その結果、私の文書力がぐんぐん上達した訳ではないことは、単に私の力不足の所以です。なお、その後約 10 年間に渡り、私は添削には赤いペンは使わず青いペンを使うことになりました。第三に、継続する力の大切さを教わりました。大変失礼な話ですが、最初にお会いしたときに感じたのは、運動神経は良くなさそう～というものでした。しかしこの直感はあえなく撃沈することになります。野副杯ではホームランやヒットをバンバン打つし、かつてあった海上運動会でもオールをきれいに裁き悠々と 1 位を取ってくる、バトミントンや水泳も、なんでもできるではありませんか。水泳は、毎週土曜日に何年も泳いでいたようです。最近のご趣味の縦笛の素晴らしい響も、特訓の賜物であることは疑う余地がありません。とにかく、練習する姿がありました。何回も何回も練習し、結局は、自分の得意なものにしてしまう。その姿勢と努力は、一番私に足りていなかったものであり、長く接するうちに、一番啓蒙された一面であると言えます。

博士の学位を取った後、私は、米国留学、理研フォトダイナミクスセンター、有機化学第二研究室での助手の経験を経て、飛田先生が教授になられた無機化学研究室に講師として迎えて頂きました。それからいつの間にか 20 年程の月日が過ぎてしまい、時間が圧縮されて感じるこの頃です。この間には、ケイ素化学協会シンポジウム、宮浦特定シンポジウム、無機分析化学コロキウム、日韓シンポジウム等の学会開催がありました。化学棟改修工事、そして、東日本大震災が起こり、化学棟 8 階の研究室は

壊滅するという事態になりました。度重なる研究室の引越し、4年間のプレハブ棟での研究生生活を余儀なくされました。ようやく新棟である合同C棟での平穏無事な生活に戻るまでの長い困難な期間は、研究室を主催するものとして大変大きな負荷が掛かっていたであろうと、同じ立場になった今では良く理解することができます。この間も、特に、英語論文の書き方をご指導頂きました。論文初稿の中に冠詞や定冠詞の間違いが一つでも見つかり、一番遠いはずの教授室から飛んできて指摘されたことは幾度となくありました。しかし、その回数は年々減っていきました。先生がいい加減草臥れてきたからでしょうか。

飛田先生は根っからの勉強家で、化学やサイエンスに関する知識はもちろんのこと、政治や音楽など幅広い分野の知識と教養をせっせと蓄積し、本当に博識な学者であったと思います。案外におしゃべりで、お昼休みや飲み会の席でいろんな話をしてくれました。先生が話した言葉そのものはあまり覚えていませんが、不思議とその時の情景や言わんとしたことは感覚的に心に残っています。学問や研究に対する情熱や教育に携わる立場にあるものの姿勢を常に示してくれていたと思います。

そして、とても家族思いの“お父さん”であることにも言及しない訳にはいきません。ご息女・ご子息がまだ小さい頃から、毎年のように夏には家族総出でキャンプに行った話をよくお聞きしました。テントを張り、薪に火を点ける担当だったようで、研究室旅行や芋煮会の折にはその熟練した火を熾す技術を学生に手解きして下さいました。飲み会の後には、いつもご家族のためにドーナツを一箱買って帰る姿がありました。家庭の中にあっては、ご家族と過ごす時間を大切にする最高のお父さんであったと思います。

最後に、コロナ禍がまだまだ続きそうですが、ご健康には十分留意してお過ごし下さいますよう、心よりお願い申し上げます。